

ければならぬ。機械的な、無理矢理なものならぬやうに注意すべきである。

私は、こゝで若干の例について述べたに過ぎない。大いなる政治的危機が刻々に迫つてゐる現在の重要な時期、特に吾々の階級的組織が次々の打撃をうけて必死の闘争をつゞけてゐる時期にあつては、吾々は現在の組織上の弱點を至急に埋め合し、鞏固な地下建築に基礎をおく、工場に根を張つた吾々の組織を強大にし、廣大なる大衆を××に準備するためには、前時代からのあらゆる弊害、缺陷、不充足さを克服してしまはなければならぬ。

七 理論的訓練とインタナショナルリズムの昂揚

現在多くの同志が奪はれてゐる。新しい活動分子は出て来てゐるが、新しい状態に應じて充分な活動能力を示すのはなかくである。屢々組織は破壊され活動分子は引き凌はれる。そして、その度に新しいやり直しをする。このやり直しに費す精力を節減するためには、経験の集積が飽くまで必要だ。新しい状態に適應しないものもあるが、數年の左翼労働運動の諸経験は汲めども盡きぬほどに豊富にある。吾々は、過去の経験を研究し、利用し、攝取するために努めねばならぬ。

それにつけても必要なのは、理論的な水準を高めることである。理論は経験の總括である。×の見地からマルクス主義レーニン主義の労働者教育を活潑にすることが刻下の急務である。

運動の轉機に當つて急速な時に、機械的な轉換をすることが、從來、度々あつた。理論を正しく把握し、理解した上ではなくて、殆んど無批判に之を取り入れ、粗雑に解釋する。吾々は、現在でも正しい戰闘的方針が時に歪められて理解されたり、實行されたりする事例を見るのである。

吾々の運動は、ずつと前に福本主義から絶縁した。この絶縁には、福本主義の誤謬、即ちその唯心哲學と外見上極左主義の形をとつた日和見主義戰略と戰術とを理論的に批判しつくすことが不可欠であつた。そして、その自己批判が徹底すればする程、吾々はより早く全面的に過去の誤謬から脱け出し、正しい教訓を汲みとることが出来るのである。福本主義は間違つてゐた、——かう簡単に片づけることは、宛も福本君が獨斷的に山川氏に代表された日和見主義を片づけやうとしたのに等しい。福本主義の完全な清算には、理論及び實踐のあらゆる方面に亘るその徹底的批判の上に立つてこそ初めて出来る。そしてその方法を以つてこそ、吾々はこの時代から必要な幾多の教訓を引き出して、自分達のものとする事が出来る。


之に反して、「勞農派」の方法は昔ながらの二律背反である。他人の降伏——實はプロレタリアートの武裝解除——を強要するために「自己批判」を云々するこの一派は、福本主義の時代から何一つ學ばず、また學ばうとしない。そして、彼等の解黨主義、セクト主義は絶対に正しいといふのだ！

現在の時期に、闘士の理論的鍛冶は極めて切實な必要事である、そして、闘争の裡に新しい指導者

を養成することが必要である。吾々は工場に於ける研究会、組合の分會や支部の茶話會、討論會、讀書會、地區、大小の地方的規模の研究会や學校によつて、レーニン主義的教育を起すことに取りかゝらねばならぬ。

最後に力説すべきこと、即ちインターナショナルの昂揚、帝國主義戦争の脅威に對する闘争を強めること、殖民地人民への援助、支那革命及びサヴェート同盟防衛の觀念の精力的鼓吹。この三月創立十週年を祝つた××インタナショナルは戦争のなかゝら生れ出た。戦争と××との交互關係を辯證法的に理解する吾々は、その故に一を他に結びつけるために、反動的帝國主義戦争に對して全力をあげて闘争する。「一九一九年の闘争を帝國主義戦争反對に集中せよ」——之は『無産者新聞』が今年の一月一日號で大衆に呼びかけた言葉であつた。全政治問題の中心は、戦争の問題である。吾々は戦争の危険に對する闘争を吾々のあらゆる日常の仕事に侵透させ、その闘争を益々強め、且つ戦争に對する組織的準備を整へねばならぬ。

——署名「永田幸之助」、「マルクス主義」一九二九・四月第五六號——

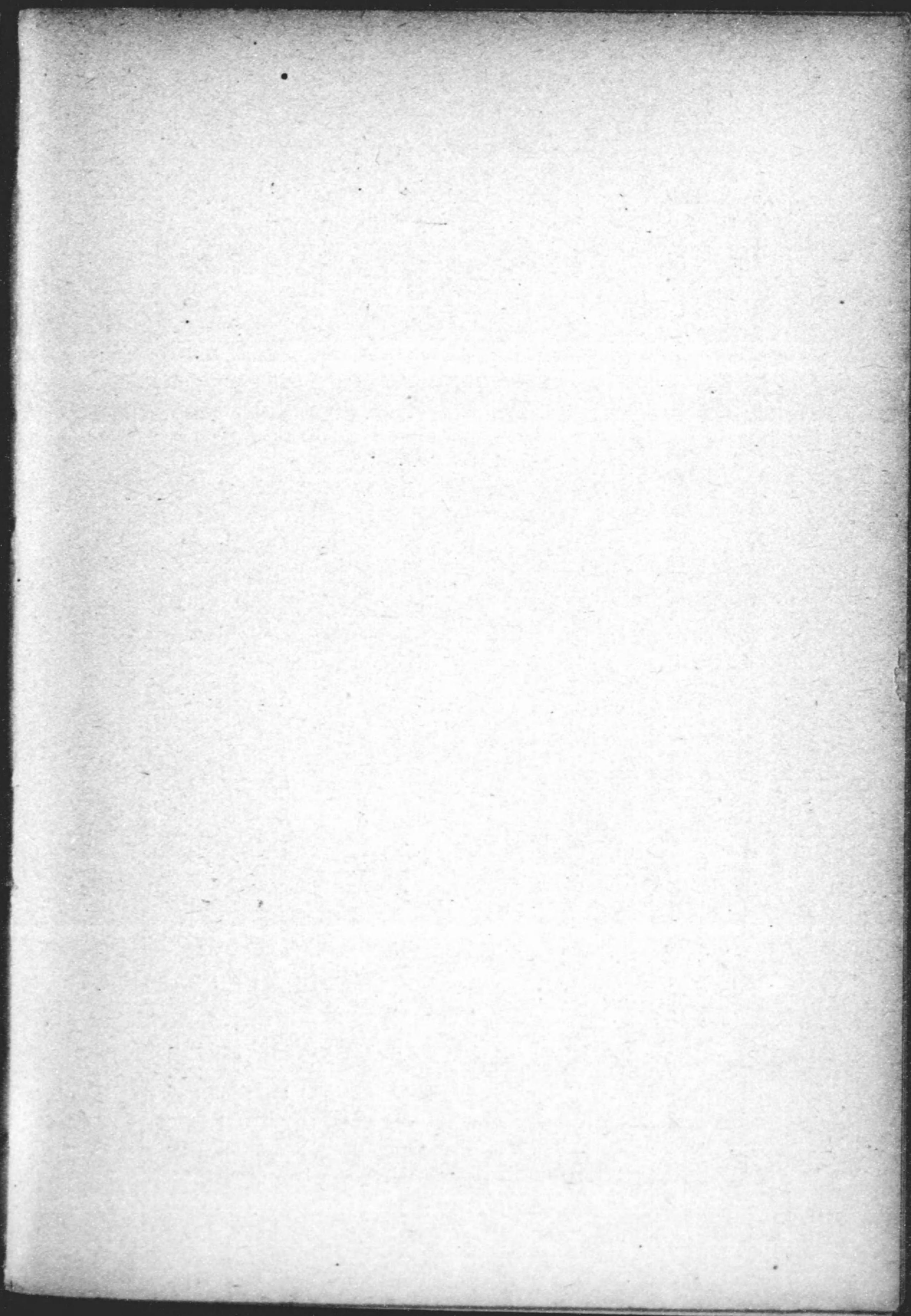
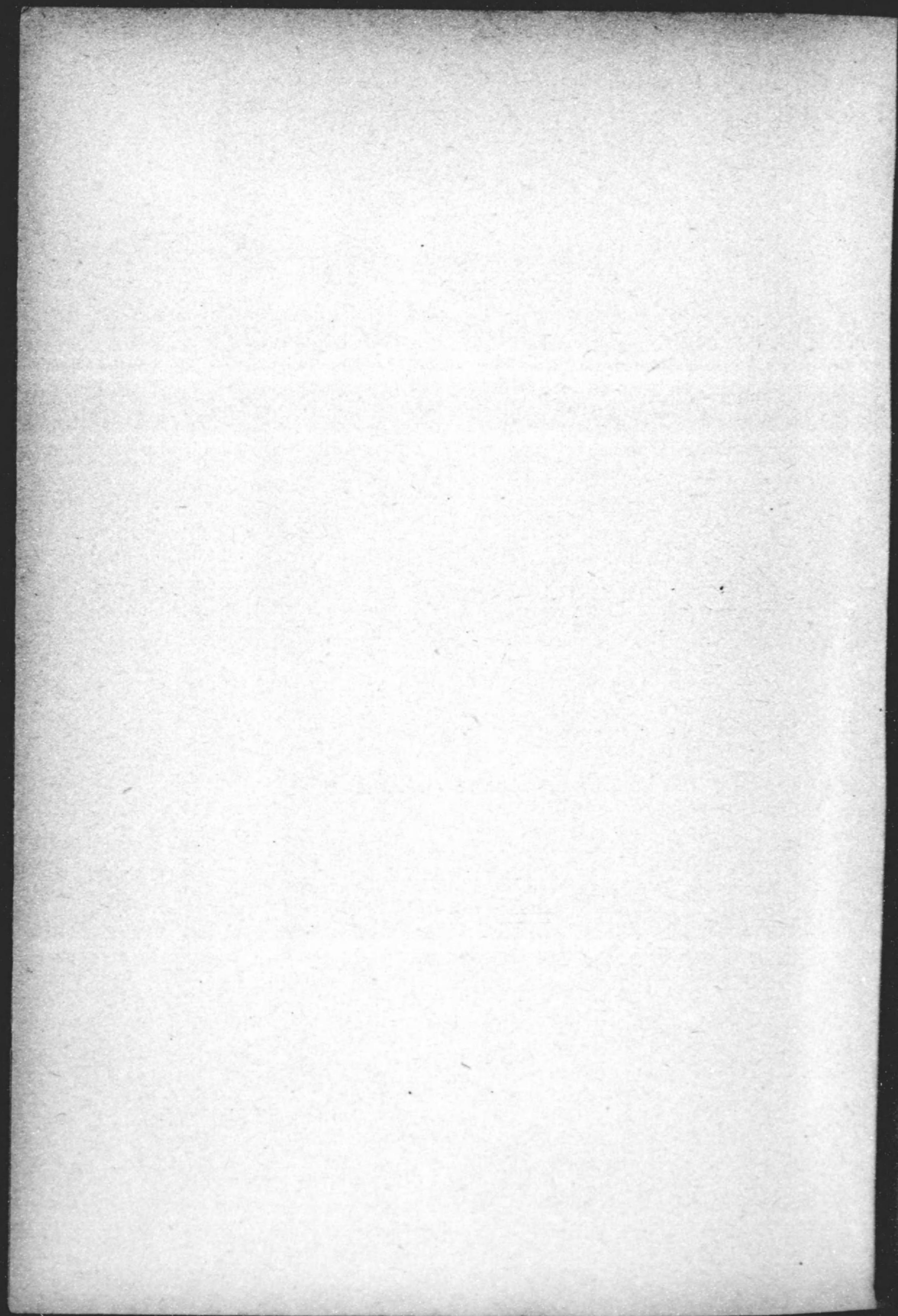
<p>昭和六年二月十日印刷 昭和六年二月廿日發行</p>		<p>著 者 高 橋 貞 樹</p>	
		<p>定 價 金 一 圓</p>	
<p>所 有</p>		<p>著 者 高 橋 貞 樹</p>	
<p>發 行 所 東京市神田區今川小路三ノ六 振替東京六七五一九番 希 望 閣</p>		<p>發 行 者 東京市區神田區今川小路三ノ六 市 川 義 雄</p>	
<p>印 刷 者 東京市外下戸塚二四〇 内 田 廣 藏</p>			

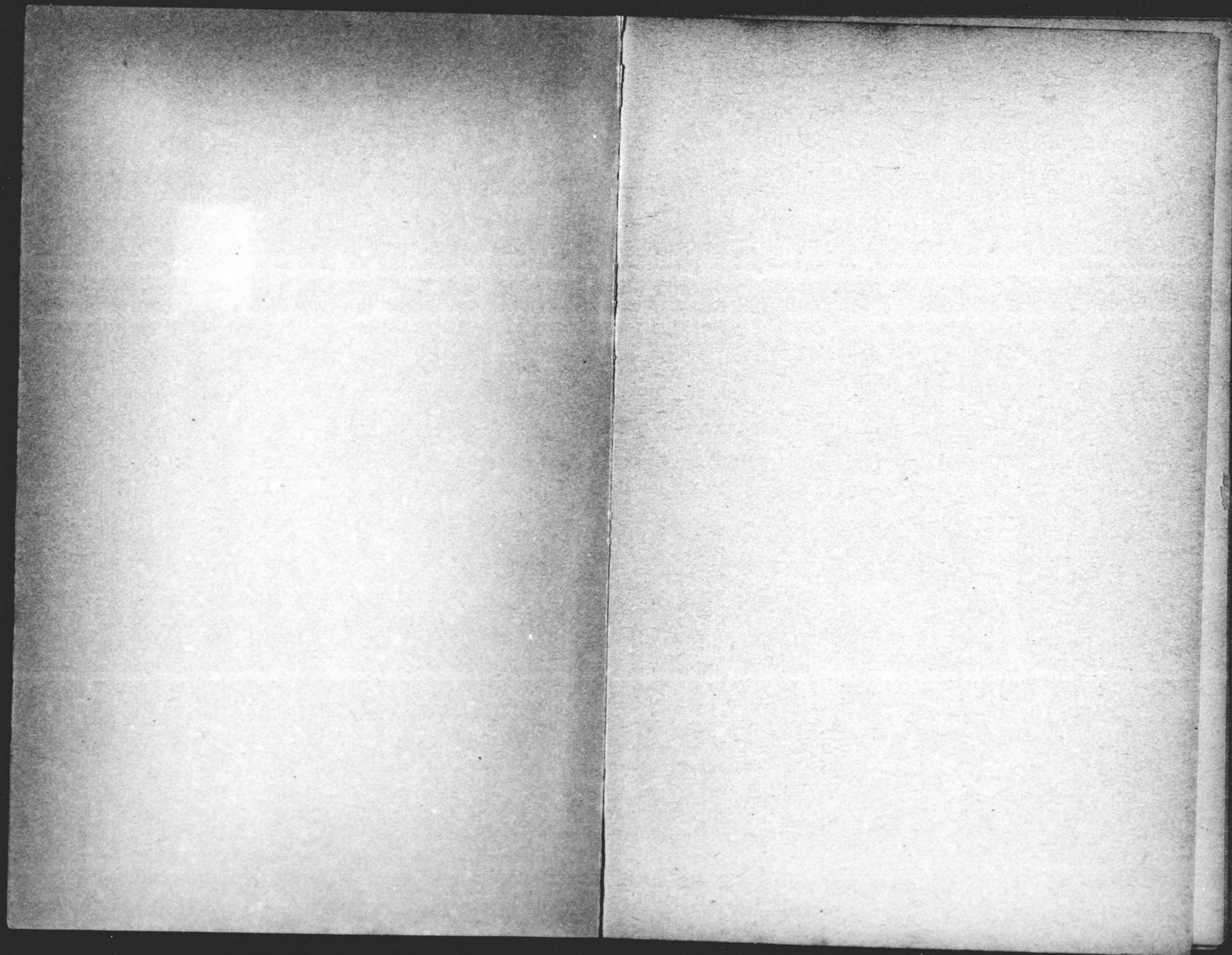
【行印所刷印原萩】

希望閣出版書目

著者	書名	定價	送料	著者	宗 教 論	定價	送料
メス・メント	職工長ミツク	一、〇〇	二、〇〇	佐野 學者	宗 教 論	一、〇〇	二、〇〇
河上 肇著	マルクス主義批判者の批判	一、五〇	二、〇〇	デボリン著	哲學とマルクス主義	一、五〇	二、〇〇
布施辰治著	小作爭議法廷戰術	一、三〇	一、八〇	河上 肇著	マルクス主義經濟學	一、三〇	一、八〇
ミリユーチン著	農業問題	一、四〇	一、九〇	佐野 學者	唯物論哲學としてのマルクス主義	一、三〇	一、八〇
大西俊夫著	農民運動の道	一、八〇	一、三〇	シヤバロフ著	マルクス主義への道	一、五〇	二、〇〇
フーリン著	世界經濟と帝國主義	一、三〇	一、八〇	ロシエーチン著	サヴェエト憲法	一、八〇	一、三〇
村山藤四郎著	政治的戰略II戰術	一、六〇	二、一〇	アヂアチクス著	廣東から上海へ	一、六〇	二、一〇
山根一郎著	産業合理化と労働階級	一、二〇	一、七〇	産業労働調査所	闘争と建設の勞農ロシヤ	一、七〇	二、二〇
無産者新聞社	無産者新聞論説集	一、〇〇	一、五〇	所 産業労働調査	抗争せざるべからざる建設期の諸逆流	一、七〇	二、二〇
服部之穂著	明治維新史	一、二〇	一、七〇	村山藤四郎著	労働組合論	一、六〇	二、一〇
				エンゲルス著	自作農制定と農業問題	一、六〇	二、一〇
					マルクス主義と農業問題	一、〇〇	一、五〇
					マルクス主義と農民問題	一、〇〇	一、五〇

ロザ・ゾラ著	改良主義論	一、七〇	二、二〇	川内 唯彦著	レニン帝國主義論體系	一、五〇	二、〇〇
産 勞 編	ロシア革命誌	一、四〇	一、九〇	ボボフ著	マルクス・エンゲルス勞農同盟論	一、五〇	二、〇〇
佐野 學者	宗教に就て	一、四〇	一、九〇	フーリン著	マルキシズム指導に關する二文献	一、五〇	二、〇〇
評議會編	工代会議の戦術	一、五〇	二、〇〇	グリマン著	革命と性生活	一、三〇	一、八〇
マルクス著	クーゲルマンへの手紙	一、三〇	一、八〇	マルチノフ著	マルクス主義と農民問題	一、五〇	二、〇〇
コルシユ著	マルクス主義と哲學	一、二〇	一、七〇	エリコリ著	フアシズム論	一、五〇	二、〇〇
塚本三吉著	ソヴェト・ロシア辭典	一、〇〇	一、五〇	河上 肇著	マルクス主義のための	一、四〇	一、九〇
研究所編	ウラヂミル・イリイチ・レニン	一、三〇	一、八〇	ヴァルガ編	社會民主主義諸政黨	一、六〇	二、一〇
瓜生 信夫著	人間レニン	一、八〇	二、三〇	クレーリン著	労働者に答ふ	一、四〇	一、九〇
瓜生 信夫著	革命の陣頭に起ちて	一、〇〇	一、五〇	大竹博吉著	ソヴェト法並に國家の哲學的基礎	一、五〇	二、〇〇
三矢 剛著	辯證法的唯物論入門	一、〇〇	一、五〇	支那問題辭典	支那問題辭典	一、八〇	二、三〇
高橋一夫著	辯證法的唯物論入門	一、〇〇	一、五〇	研究所編	支那問題辭典	一、八〇	二、三〇
アドラトスキー著	辯證法的唯物論入門	一、〇〇	一、五〇	高橋一夫著	農業問題と「マルクス批判者」	一、〇〇	一、五〇
北野・何野譯	レニン主義の理論と實踐	一、八〇	二、三〇	清水三郎編	反動期に於けるマルクス・エンゲルス	一、〇〇	一、五〇
産 勞 編	レニン主義の理論と實踐	一、八〇	二、三〇			一、〇〇	一、五〇





禁安

217



¥1.00